

令和 8 年度 法人事業計画

令和 7 年度から 8 年度へ

◇キャリアプラン策定会議継続中

厳しさを増す福祉人材の確保・定着へ向けて標記会議を開始した。法人課題 5 項目を抽出し、解消目的を、『職責の明確化と研修や面談を通して法人理念に沿った人材育成を行い、職員が目的意識をもって、意欲的に長く働きたいと思える安定した法人運営を行う』『職員一人ひとりがスキルアップすることで、質の高い専門職集団として福祉サービスを提供し、利用者の自分らしい生活の実現や地域福祉に貢献できる法人となる』の 2 項目とした。今後はゴール像を具体化していくことになる。令和 8 年度には原案を完成させたい。

◇障害福祉人材不足直撃

そんな中、令和 7 年度末に退職や育休取得者の申し出が重なり、人手不足の現実直面させられた。公的機関に公募しても応募者はほぼゼロであり、初めて有料求人広告サイトも 2 社利用したが厳しいままである。福祉の中でも障害分野での人手不足は突出しており、その原因も明確であるが一法人で対応できる問題ではない。何があっても利用者支援に影響を及ぼすようなことがあってはならない。求人対象窓口を明確にしてパイプを創り直すところから始めていく。

◇福祉体験学習作文優秀賞

今回も咲くら工房での体験者の作文が表彰された。前回の方は「利用者の個性と、その助け合い」に注目され、今回の方は、「対人援助は利用者のモチベーションを保つこと」と喝破されている。若者達の夢の実現をサポートしたい。しかし、福祉業界の危機感は過去にないレベルにある。しかも、小規模経営では単独での事業継続は困難なのではないか。自分達のアイデンティティを大切にしながら、どこと、どう繋がっていくのか。利用者地域を大切にしながら方向性を見極めていく。

◇法人事業所横断プロジェクト『ジョブラボ』活躍中

就労移行支援のノウハウを法人内の就職希望利用者に還元すべく活動を開始した。事業を横断して、全職員がエントリーされた方々に様々なプログラムを提供している。咲くら工房を利用しながら超短時間雇用でコーヒー豆の輸入販売店勤務の方が、お一人目の企業就職者となった。お二人目は御影倶楽部から、週 5 日勤務で製麺販売店での清掃業務に従事している。勤務終了後は地活わかばへ立ち寄り、会話を楽しまれてから帰宅している。希望者には今後も就職支援を提供していく。

◇咲くら工房買取り交渉継続中

法人は無借金経営を続けているが固定資産の占める割合が低く(基本財産が建物のみ)、永続的な事業継続のためには土地の取得が課題となっている。ここ数年来、賃貸借契約をしている土地と建物の買取りへ向けてオーナーや行政との交渉を進めている。法人としては大きな支出となるが、令和 8 年春には契約に結び付けたい。買取りが実現すれば将来的には建替えも検討し、法人が取り組めていない地域

から必要とされる事業開始へ向けたスペースも確保していきたい。

◇地域に開放する福祉講演会の実施、継続

令和7年度は大阪大学大学院の村上靖彦氏(人間科学研究科教授)を講師に、『ケアと生きるスペース』をテーマに開催した。当日はリピーターも含めて53名に参加頂いた。令和8年度は、同志社大学の毛利真弓氏(心理学部教授)に講師を既にお願ひした。氏は島根あさひ社会復帰促進センターで、日本初となる「治療共同体」の立ち上げから7年間支援員として訓練生に関わられた。福祉のファンを増やすべく、社会福祉法人独自の地域への関りを今後も更に深めていく。

具体的な行動計画

情勢は、「強さを誇示するばかりで、命あるものに対しての本来あるべき眼差しが決定的に欠落したもの」になりつつあるのではないか。崩落寸前の大きな虚構を眼前にするような思いがある。そんな流れの中だからこそ、社会福祉法人としての障害者福祉の歩みを止める訳にはいかない。事業継続の土台を常に点検・修復し続けていく。

今後当面の重点課題を以下3項目に絞り込み、利用者と地域福祉に貢献していく。

- 人材の確保と定着を第一とする。
 - ・求職窓口とのパイプを作り直す。
 - ・キャリアプランを策定して実行する。
- 上記のためにも、障害福祉の遣り甲斐と魅力を現場に落とし込む。
 - ・利用者から情報発信する機会を増やしていく。
 - ・職員が学び、喜び、成長する姿勢を広報する。
- また、一法人だけでは生き残れない可能性があることを認識する。
 - ・法人の理念を再確認、実践する。
 - ・法人間での横の繋がりを構築する。
- 事業継続の物理的な側面から、BCPを見直していく。
 - ・アンケート調査では非常時に対応できる職員数の不足が露呈した。
 - ・事業所の実態に応じたBCPに改定する。

以上